

「見方を変えようと」

小学生の息子は少年野球のチームに入っています。最初はキャッチボールもすっかりとできませんでしたが、練習を重ねるうちにだんだん上達し、今では内野手の背番号をもらい、長打も打てるようになりました。私も他の保護者の方と一緒に試合を見に行つては、大きな声で応援したり、差し入れをしたり…。子どもたちが活躍する姿を見たくて、グラウンドに行くのがだんだん自身を楽しみになっていきました。

六年生になると、県予選で勝ち残れば全国大会に出られる大きな大会に出場します。小学生最後の大会を私も楽しみにしていました。ところが抽選の結果、初戦で昨年度の優勝チームと対戦することが決まりました。それを知ったとき私は、「せっかくがんばってきたのに初戦敗退かも」「組み合わせが違えば上位にいけるのに」と感じました。他の保護者の方も同様に感じられたようで、中には抽選に参加したコーチへの非難の声もありました。

夕飯の時、息子に「今度の初戦の相手、すごく強いチームやん。最後の大会やのになあ。」と残念そうな口ぶりで話をしました。すると息子はこんなふうに言いました。

「うん、めっちゃ強いぞ。ぼく、あのチームのピッチャーと対決してみたかってん。だから今、カーブを打つ練習がんばってるねん。はよ試合したいな。」

私はこの言葉を聞いて、さっきの自分の発言が恥ずかしくなりました。息子は野球を心から楽しんでいて、県内ナンバーワンのチームと対戦できることにわくわくしているようです。勝敗だけが大事なのではなく、この言葉こそが野球を通じて息子が成長した証あかしなのだと感じました。また、息子の言葉から「負けたら全国大会に行けない」というのではなく、「子どもを今一番大きく成長させてくれるチームと試合できるんだ」という見方をもつことができました。すると試合だけでなく試合までの日々がとても大切に感じられるようになり、また対戦相手に対しても自然と感謝の気持ちももてました。

試合後、ひとしきり泣いた後で「あんなカーブ打てるわけないやん。」「でもおれ、もうちょいで打てる気がしたねん。」「おれももう一回あいつと対戦したい！中学で会ったら絶対ホームラン打つしー」と話している子どもたちの声を聞きながら、自然と笑みがこぼれました。

私は子どもを見ると、他との比較や結果だけに目がいきがちでしたが、今回のことをきっかけに、おらかな気持ちで子どもに接することができるようになった気がします。これからも目先のことだけにとらわれず、見方を変えることで何が子どもにとって大切なのかを考えられるようになりたいと思いました。

